



二五七〇七

卷八十一

①
XI
7



第八冊目錄

自昭和十年一月至昭和十一年六月

第百廿六回—第百四三回

第百廿六回	一月	滿洲里附近 (綏安北省)
百廿七	二月	海拉爾と呼倫泊 (口省)
百廿八	三月	綏安後と齊春哈爾
百廿九	四月	綏中, 山海關 (奉山線)
百卅	五月	興城と葫蘆島, 連山 (全線)
百卅一	六月	北滿經濟風物
百卅二	七月	蒙古人生活 (綏安北省)
百卅三	八月	虎林及興凱湖 (洮江省)
百卅四	九月	烏蘇里江岸風光
百卅五	十月	大板上附近 (綏安西省)
百卅六	十一月	朝陽, 赤峰, 烏丹城
百卅七	十二月	林西と大板上
昭和十一年 百卅八	一月	北岔子採金場と木揚溝
百卅九	二月	北鮮諸要港
百四〇	三月	山城鎮と海龍と磐石
百四一	四月	琿春, 延吉, 敦化
百四二	五月	元帥林と西安炭坑
百四三	六月	農安と扶餘
百廿六回附録		帰り路 (熱河にて)





◎ 滿洲里遠望

(興安北省)

滿洲國の最西端露滿國境の町滿洲里は、東支鐵道敷設と共に開けた町で、以來種々の方面から重要視されて來た處である。時勢の轉移は近來昔日の俤はないが現在人口六千四百内邦人三百五十人政治的には國境都市とし、軍事上には國防線として最も樞要なる町で、遙か彼方國境の山嶺くあたり一沫の妖雲が漂ふを覺える。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 滿洲里驛

(興安北省)

北鐵西部線は滿洲里を終點とし、こゝからザバイカル線に連絡してチタ、イルクツクを経て歐露に續く。滿洲の西の窓口として文字通り白と赤との分岐點で嚴重な監視が行はれ、何となく緊張された氣分が漂ふ。驛を中心として片側は鐵道従業員の街で片側は市街である。

(印圖の複製を嚴禁す)



◎ 滿洲里市街

(興安北省)

滿洲里は海拉爾に次ぐ此地方での市街で、石炭、乾草、魚類等の取引行はれて居るが、滿洲里事件其他で災され今は往年の繁榮の影も失せて商業不振の結果は生氣の乏しい町となつた。路行く人々の姿にもどつかにロシヤ氣分の濃厚な處があるが何となく陰氣な空氣が覗はれる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 甘珠爾廟

(興安北省)

甘珠爾廟は海拉爾より約二〇〇軒の處、乾隆時代烏爾順河の蒙古包に人々の信仰を集めた喇嘛廟が後年勅旨により現在の地に再建されたもので、西藏、庫倫と共に三大活佛の一つである。曠野の中に唇氣樓の如く浮ぶ丹碧の伽藍は流石にそれと思はしむる。こゝで有名なのは毎歲陰曆一月十五日から開かれる活佛祭に伴ふ『牧民市場』で、遠く内蒙の各地から集る物々交換の人々で廟の廣場は包に埋もれ大股賑を極める。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 神に禱る

(興安北省甘珠廟)

喇嘛廟の一日は黎明の勤行と共に明けて、重い經典の函を背負った婦人の一團は輪をなして經文を口ずさみつつ廻る。住民の殆んどが信者で且つその生活は宗教が凡てである。銀飾りに盛裝した女とその夫とが今難病を療さんと呪文を唱へながら幾回も幾回も或は伏し或は立ち廟の周圍を廻つて居る。凡てを神にたよる無智の姿が可憐らしい。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎包を組む

(興安北省)

遊牧の生活を恒とする蒙古人は牧草を追ふて所定めぬ放浪の旅をつゞける。昨日迄屯した一群も今日は西に東に袂を分つ。蒙古包は生活に則した簡易な移動家屋で、疊込式に柳材で編んだ外側と、傘の骨組に似た穹形の屋根と絨氈だけで半時間程で組立てられる。周圍に散らされてるのは家財の全部である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 祭典の後 (興安北省甘珠爾廟)

年一度の祭典と市は終つた。昨日迄は歡樂と雜踏の渦に、餘興や邂逅の團樂に盡くるなき日を展開した廣場も今日は又元の殺風景な草原に歸つた。包を疊んで四散する人々の中には來年迄は遇はれぬ人への盡きぬ名残りを惜しむ人もあらう、駱駝の背に首の鈴の音をきよながら妻女への土産話にはゝえむのもあらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 廟の修理

(興安北省)

索漠とした蒙古の旅の無聊を慰めるものに、華麗な喇嘛廟の丹碧がある。一望千里轍の跡を砂塵を浴びながら西黄旗廟に辿りつひて一憩した一行は、軒先で赤や青の繪筆を弄して裝飾の修理をしてるのを見た。眞晝の陽は強くこの藝術家を照りつけて濃厚な色彩を鮮やかに浮かせて居た。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 絨氈を造る

(興安北省)

部落々々から買集めた駱駝や羊の毛は、拙稚な工人の手に綿打され石灰水で固められ足踏されて絨氈となる。ダライ湖西北の部落で拾った圖で、遮るものなき曠野の中に暢氣に足並を揃へて踏みながら口にする歌の音は果てしなく流れて行く。やがて黄いペールが地面を翳ふ頃には牧歌的な夕暮が訪れることであらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 察罕諾爾炭坑 (興安北省)

滿洲里より南西四里計りの處に察罕諾爾炭坑がある。採掘量も少く炭質も粗悪な炭で、僅かに滿洲里市民の薪炭代りに使用される位である。晝も夢を見てるやうな悠暢な駱駝を役使してゐる舊式な作業はこの邊ならでは見られぬ情景である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎海拉爾全景 (海拉爾)

海拉爾とは蒙古語の「アルバン、ホト」の意、副都統都市をあらはす語で、呼倫貝爾政廳の所在地その地方一帯の中心として蒙古貿易が盛んに行はれて來た。人口一萬五千餘、市街は伊敏河の左岸にあり、鐵道の北側は瀟洒なロシヤ街、南は城内で滿蒙人が雜居する商埠地である。現在は北鐵沿線の主要地として經濟上にも軍事上にも將來益々樞要な處である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 海拉爾公園 (海拉爾)

海拉爾は低い砂丘に圍まれた町で西方に松原に包まれた小丘がある。楚々たる綠樹の間に點在する小廟を眺めると日本の内地らしい趣がされる。地方土着の人々が永く神林と崇敬し來た處で今は松原公園と名付けられ都人の遊歩地となつて居る。なだらかな起伏の上に建てられた新らしい忠魂碑は未だ血腥い尊い追憶を喚び起させる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 海拉爾舊市街 (海拉爾)

一步外へ出れば蒙古包やオボなどが見られる程海拉爾は蒙古包の豊かな町である。城内は屋根の低い廂の突出た軒並が続いて、滿蒙兩語の看板を掲げた老舗の店先には蒙古人相手の金銀の首飾り細工や装身具が多い。その中を裸かの悍馬に乗った買物の蒙古人が行交ふあたり古風な蒙古趣味が味はれる。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 暮れ行く郊外

(海拉爾)

海拉爾郊外暮れ行く曠原の空は、草原を甬ふ夕靄のうちに静かに陽は傾く。一沫の寂寞をたゞへるなかに、黙々として家路へと急ぐ無心の畜牛の群を見る時、泌々と牧歌的な懐しみのうちに融合されて行く。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 毛皮を乾す家 (海拉爾)

呼倫貝爾地方一帯は獸毛皮の産出多く、海拉爾はその集散工業地として交易品の主位を占め馬具皮靴其他の工作品となつて輸出される。皮革工業は盛んに行はれて居るが末だ一般に屋内工業の域を脱せず、海拉爾に二三の整つた工場を見る位のものである。此の町では隨所に日當りの良い空地に天日に乾されてる毛皮が見られる。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 呼倫池フレインールの漁撈

(興安北省)

蒙古人は由來信仰上の關係から漁撈を行はなかつたので呼倫池は永い間魚類の繁殖場として保たれて來た。ロシア人が入込む頃から漁撈が行はれ漸次企業化され漁場も二十ヶ所にも及んで、一時は産額六、〇〇〇疋もあつたが亂獲のため今ではその半數位に減少されて居る。漁撈は冬期主として西沿岸に行はれるが圖は夏の閑散期の蝦採りの實況である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 呼倫池 (興安北省)

呼倫貝爾地方の地名を生んだ呼倫池は滿洲里の南方約四千料の處にあり、草原を縫ふて走る烏爾順河によりて貝爾池に繋がる。周圍約百五十料あり日本の琵琶湖に倍し、豊富な水量は縹渺として海と異ることなく、幾日も砂原と草原のみを見馴れた眼がこの水天髣髴の景に接する時、身は砂漠の旅にある事を忘れる。池は淡水魚の漁撈で名高い。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 札賚諾爾炭坑

(興安北省)

滿洲里驛から東方約二十七料の處に札賚諾爾驛がある昔からの炭坑町で露支事件前迄は相當に活氣のあつた處北鐵直營で品質不良の褐炭が主なため需要は少いが鐵道沿線にあるため有利である。埋藏量七〇〇萬噸と云はれ、採炭は露天掘で主として冬期に行はれる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ ロシヤの農夫 (興安北省にて)

さしやかな背戸の畠に播かれた農作の收穫に、一家は  
擧つて嬉々として鋤をとつて居る。大方は國を追はれた  
家族の集ひであらう、華かなりし帝政の思出も今は昔の  
悪夢、土に微笑む面持ちこそ自から物語る安住の境地で  
あるまいか。ダライノール炭坑近くでふと眼に止つた一  
情景である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 國 境 の 山 (興安北省)

遠く外蒙庫倫に源を發した克魯倫河<sup>クドロン</sup>が國境を越え内蒙に入るところにトイルグインウラー山がある。丘上より一望すれば眼前に展開せられた曠原の彼方此方には放牧の屯が点在し、クドロンの清流は銀蛇の如く蜿々としてその間を縫ひ、遙か視野のつくるあたり右方幽かに見える連丘は國境アンドロノウタウ山である。

この山一帯は瑪瑙の原産地として名がある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 荒木大尉の碑

(興安嶺)

事變以來描かれた「戦の繪卷」のうちでも、昭和七年十二月三日吹き荒ぶ朔風のなかに肉弾を挺して花吹雪と散った荒木大尉の物語は涙ぐましいものである。興安嶺環状線の手前西行した鐵路の左側に、當時突放車に積まれた石塊を疊み墨痕も鮮かに築かれた石碑がそれである、低徊暫し點禱を捧げて過さる。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 札免公司林区

(興安嶺)

興安嶺と云へば、永い間忍苦を續けて來た札免公司の辛酸が想起される。前方僅かなる屋舎の屯は嘗つて公司従業員の宿舎で小學校もあつた處であるが、事變の際兎徒の兵燹に禍され二ヶ月餘も密林深く逃避した折の其儘の姿である。全山廣袤四國大の林区から無盡藏に伐り出される材木は主として枕木として搬出される。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 山の宿驛

(興安嶺)

大隧道西口を出ると間もなく、白樺と針葉樹に囲まれたささやかな興安驛がある。冬は嶺を渡る吹雪に閉ざれ夏は燎爛の御花畑に、永い間秘められた「山の話」の主興安嶺にふさはしい宿驛である。今は靡る日章旗の下に攻防の第一線として重要な存在を物語つて居る。

(印誌の複製を厳禁す)



◎ 興安隧道東口

(興安嶺)

露西亞帝國の野望が莫大な經費と永い歳を費して環狀線を作り、三千米突の大隧道を穿つた事は興安嶺の重大性が窺れる。爾來幾多の經緯を経てその間隠れたる尊き犠牲が捧げられ今日に至つた。今靜かに車内の客となる時轉た感慨無量のものがある。圖は東口より前方を望みたるもの遙か白樺の内に見ゆる小舎は守備隊の兵舎である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 白樺の林

刻々と移り行く高原の空は、今迄澄み切つた蒼穹に一沫の白雲動くと見る間に、嶺から嶺へとなだらかに織くスロープを包む。悠々たる興安の連丘の中、白樺の眞白き木肌のみが静寂のうちにくつきりと純眞な感觸を齎らす、高原の夏はあはたたしい。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 齊々哈爾城內

(齊々哈爾)

齊々哈爾は往年ロシア帝國の北境侵略に際し邊防のため築かれた城廓で、一名卜魁と呼ばれ、地方政治の中心地として省城を置かれ今日に到つた。現在は黒龍江の政廳所在地で事變後師團司令部及飛行場あり軍事上樞要の地となつて居る。人口約十萬その内邦人五千人を算する。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 齊々哈爾舊市街

(齊々哈爾)

外城は今は殆んど破損して舊形を止めないが、昔は南北三十町東西二十六町よりなり五門ありしもの、内城より新市街に続く間は商工業地区にて、舊市街は北滿の町によく見る屋根の低い軒の突出た家並が續く。商埠能開放と共に蒙古人は漢民族の壓迫に追はれて今は殆んど影もない。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 魁 星 樓

(齊々哈爾)

内城の東南隅に孔子廟あり、こゝに丹碧の麗美しい魁星樓がある。内城は磚城と云はれ東に承暉、西に平定、南に迎恩、北に懷遠の四門あり、城内は官公衙、官舎等置かれ商舖の少き點は他の北滿で見ると趣を異にして居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 商業街をのぞく

(齊々哈爾)

迎恩門より南門外南大街を望めば、大商店軒を並べ往來の馬車自動車輻輳し、伸び行く齊々哈爾の殷盛が視れる。昂々溪にて北鐵と連ると共に、平齊、洮昂の兩線に續き交通上重要な處であるが、農工業餘り振はず生産都市と云ふよりも寧ろ消費都市の感がされる。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎筏の午餉

(齊々哈爾)

齊々哈爾の西門外廣漠たる原野に續く處に嫩江支流西  
泡子がある。夏期は漁撈も盛んに行はれ帆船の航行もあ  
り、上流より燃料を満載した筏は流れ來て遠く松花江に  
行く。筏の上アンペラかはりの白樺の小舎に晝餉をとる  
筏夫の顔に夏の陽は長閑に照る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 水ぬるむ

(興城郊外)

閉された冬の帳がとられ地殻がぬるむ頃になると、水面にも柔らかな小波が揺られ、やがて迎へる春の氣はいが水際の小枝の色にもぞかれる。春とは名のみ軒をさす陽の光は弱いが、柔らかな感觸のうちに自づと甦る陽炎はやがて紅の大桂クワグワ兒燃ゆる姑娘クニヤンの胸に訪れの喜びを囁く日は近づく。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 祖氏石坊

(興城)

醫巫闾山、錦州の塔、義縣の大佛と共に奉山線の四大名勝に數へらるゝものに興城の石坊がある。明末の奇傑袁崇煥の部將祖大壽の建立したものと云はれその名あり二基共に三丈六尺、精巧な彫刻は塵にまみれては居るがこの邊には珍しい牌樓である。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 梨の貯藏

(緩中)

緩中の驛近く燗突のやうな格構に土を盛り上げた通風筒の立ち並ぶのが見られる。附近から産出された梨の實を地下に貯藏して置く穴倉の装置で、梨は年額七十萬圓から百萬圓位の産出を見る地方の主要物産である。遠く熱河地方から集るものも總稱して緩中梨として輸出されて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 城 壁

(綏 中)

澄み切った蒼穹の下に曝された灰黒色の破壁に春の陽は照りつけ、代赭色の畝の起伏にはやがて萌ゆる草の香がかげらふ。どこかに驢馬のだるい嘶きが聞えて日は今盛りである。

綏中城は唐末の建設にかゝるものと稱せられて居るが壞れかゝつた残壘の跡には未だ新しい事變の苦戦を物語る記念も残されて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 綏中城門

(綏中)

綏中縣は所謂關外第一縣と云はれ今も滿洲國と民國とが境を接する地である。綏中は熱河を経て對蒙貿易の上に發展して來た町で現在は昔日の面影は失せて閑散であるが、嚴めしい城門に新たに掲げられた大扁額は更生の町綏中として往年の殷盛を約さるゝかに見える。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 綏 中

(奉山線)

綏中は縣公署の所在地で一名を中後所とも云ひ、周圍約五支里の城壁に圍まれて居る。地形上縣内の物資は勿論隣縣の一部も皆此處に集められ、熱河地方に輸移入さるゝ物資の通過地として以前は殷盛を極めたが事變や兵匪のため現在は疲弊の姿であるが、熱河の肅靜は必ず扼復再起を促すものと豫期されて居る、現在人口一萬七千余あり。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 角山寺

(山海關附近)

角山寺は角山上にあり樓賢寺と言はれ寺内に觀音大師を安置して居る。境内よりの眺望は絶佳と言はれるだけに、渤海は遠く平野に續きて展開され銀蛇の如き溱河の清流はその間を迂曲し、頭を廻せば興亡治亂二千星霜の間幾多の烽累干戈を物語る長城の偉容は峯より峯に蜿蜒と山腹を纏ふて遠く北方に消ゆるあたり實に天下の壯觀である。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 姜女祠

(萬家屯)

長城覇業の犠牲とされた亡夫を慕ひ、遠く浙江の奥から  
 慘苦の旅を續けた妻は漸くこゝ迄辿りついた。其日から  
 夜な夜な悲戀の哀哭は柵上に聞かれ、追慕の涙は城壁  
 を壊いたと言傳へられる民謡哀話『孟姜女』のヒロイン  
 をまつる祠である。文天祥の

秦王安在哉萬里長城築怨  
 姜女未亡也十秋片石銘貞

と云ふ有名な聯がその内にある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎羊を追ふて

(山海關附近)

殘嶺破壁二千の嶺の間、興廢悲喜幾度か反覆、今は苔  
 蒸す長城の青史をよそに、山海關の巒峯にも漸く平和の  
 陽春が訪れて山あい羊を追ふ牧夫の面上にも暢々とし  
 た情景が漂ふ。遙かに見る長柵の甍りは餘りに古りたが  
 一頭の驢馬に身を托し一日を行樂に分ちて過ぐる事變の  
 思出を弔ふのも又一しほである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 春 浅 し

(山海關附近)

山海關附近の丘陵を歩いて居ると珍らしい松原に出遇つた。未だ枝も寂しく桂にからまれた巨木の幹に吊された古鐘の下には名もないものだろう古びた廟が鎮座して居た。かつてはこの絶域に征馬を進め樹梢に響く暮の鐘に戎衣を沾ほし幽林に風をはかなんだ昔も憶ばれるが、無心の鐘に人の世の移ろひを尋ぬるよすがもない。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 興城の町 (奉山沿線)

興城の町は地勢上から軍事的樞要地とされ昔から山海關防備の第一線として堅城を築かれた歴史はあるが、地方經濟上には何等見る可きもの無い一時葫蘆島築港問題に關聯して有名になつた處である。城壁は周圍五支里四門あり、城は田舎には不相應な殿しいものであるが街は唯その内に圍まれて雑然と並んでる田舎町の感がある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 興 城 温 泉

(奉山沿線)

興城の驛から東南一邦里の處に興城温泉がある。輪廓の整備は當時この設備に着手した當局の企圖も視はれるが未完成の内に事變に相遇し今漸く新らしく温泉遊覽地として修築工事進捗中であるから、他日滿洲有數の温泉場として都會の人士を吸収する日も遠くはなからう。後の山は首山と云ひ秦の李信將軍が屯した處と云はれ頂上中央の臺座は狼煙臺の跡である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 葫蘆島(一)

(奉山沿線)

奉天軍閥華やかなりし頃、表の大連に對抗するため極秘の裡に葫蘆島築港の工事が起工された。完成の暁には偉大な喫船能力に貨物の吞吐を大連から奪はんとした計畫で巨額の費用が投じられた處であるが今はその残骸のみである。圖は海岸より鋭角の護岸工事が施され更に海上に直角的に築造された防波堤の跡である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 葫 蘆 島 (二)

(奉山沿線)

世が世なれば大規模の築港と豪壯な建築に軍閥の隆盛を禮讃さるべき葫蘆島完成の夢も今や影もなく、半ば築かれた防波堤は崩るゝに委せ無心の波はその脚底を洗ふて萬噸の巨船の換りに僅かにジャンクが岸に繋留せらるゝのみである。今は唯淋しく船付場に並ぶ帆影に嘗つては此處に滿面の得意を夢見た落魄の將を悵ぶのみ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 葫蘆島(三) (奉山沿線)

葫蘆島は連山灣口に在る島の名稱で築港はこの島と海岸の間を埋立て渤海に面する一大港灣を工作んとしたものである。この大規模の計畫が事變と共に畫餅に歸してからは廢墟同様雨曝しのまゝに残され、雜草に埋れて銷び付いた軌條や臺石などに轉變の哀れを物語るのみであるが、自然の風光明媚は此地一帯に新に大遊園地としての計畫が進められて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 宿場の午時

(奉山沿線)

嬉々として戯るゝ小孩のたゞずまひ、いとし兒を抱く母の微笑み、暫しを憩ふ宿場の午時は人も馬も家も渾然とした一幅の畫の中に純朴な暢々した姿で描かれて居る事變迄は苛斂誅求と兵匪に禍された地方も今では王道の天意に抱かれてどの邊陲にも、斯ふした樂土の面影が見られる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 連山風景 (奉山沿線)

裸の木立の下に曝された土橋とその内に積重ねられた泥の家並、どこの町にもあるやうな城壁もなければ街らしい整った町並もなく永い間の内に自から螺集した人間の寄世帯、一すちに王道樂土の平和に慕ひよる土民の集りが連山の町である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 龍 仙 池 (奉山沿線)

水滑らかな池の面はゆるやかに映された投影をたゞへて水邊をわたる微風の動きさえもない、龍神が棲んだと傳へらるる怪説も今は夢語り、柔らかな白雲は遙くともなく空にたゞよい池畔の春は未だ浅い。

大虎山西郊外にある龍仙池の景で彼方に並ぶ一廓は驛の建物である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 大 虎 山 (奉山沿線)

山中で猛虎が捕へられたと云ふ昔噺から打虎山(舊名)と云はれ後大虎山と改められその儘地名ともなつた。大虎山驛背後にある高さ二百米突計りの平坦な小山で、緩やかな途中の傾斜と山頂の眺望は附近住民唯一の遊歩境とされ夏季には納涼の小屋などさえも見られる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 錦縣の日本人街

(奉山沿線)

八角形の巨塔で知られて居る錦縣は昔から遼西の政治經濟の中心地として永く殷盛を續けて來た。事變頃から種々の事件に災されて渾沌たる状態に陥つたが、近來は漸く蕭清を見ると共に日本人の進出も多く活氣を呈して來た。圖は三千の邦人を抱有する日本人街の一部でどことなくそれらしい雰圍氣が形成されて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 當舖の招牌

(北滿)

在來産業に見る可きもの少く消費貸借が盛んであつた支那では、當舖(質屋)は錢舖と共に庶民級の金融機關として發達し相當な勢力を握つて來た。門前の龍頭を掲げた『當舖』の招牌は昔大當舖特に官當舖(官許質屋)に皇帝より使用を許可せられたものと云はれ、普通は『當舖』のみで官業の名の下に福國利民の機關として如何に重視せられたかと判る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 當鋪の入口

(北滿)

門を潛ると兩側の城壁然とした丈餘の煉瓦壁に威壓されて過ぎると入口がある。昔から名物の馬賊によく襲はれる商賣だけに道に嚴重である。扉をあけて這入ると拳銃を腰にした好々爺らしい見張りが余り頼りなさそうな恰好で鹿爪らしく立つて居る、大方は舊軍閥將校の尾羽打枯らした成れの果であらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 入質者の群

(北滿)

一段と高い鐵格子の内と外とで聲高の掛引が日毎に繰返される、やつと頭の先だけ出る位の高い窓口の内側に並んだ看貨的(鑑定人)は、當舖中でも主要な役割で相當の經驗者である。堅い格子も高い窓口も皆警戒のためで、暮夜秘かに軒燈の下を人眼をさけると云ふやうな淡い羞恥の氣持などは味ひやうにも無い。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 望月牌

(北滿)

店内の見易い個所に望月牌(質出期限早見表)が掲げられて居るのが普通で、これは『千字文』を順に書き並べ一字を一月とし漢字の下には満支一般使用の数字を書き、該當記號の質物の期限や利子を簡單に判るやうな便法である。流質期限は一定せず店の大小により異り一般大當舖は永く十數ヶ月に及び利子も安い。

(印畫の複製を嚴禁す)

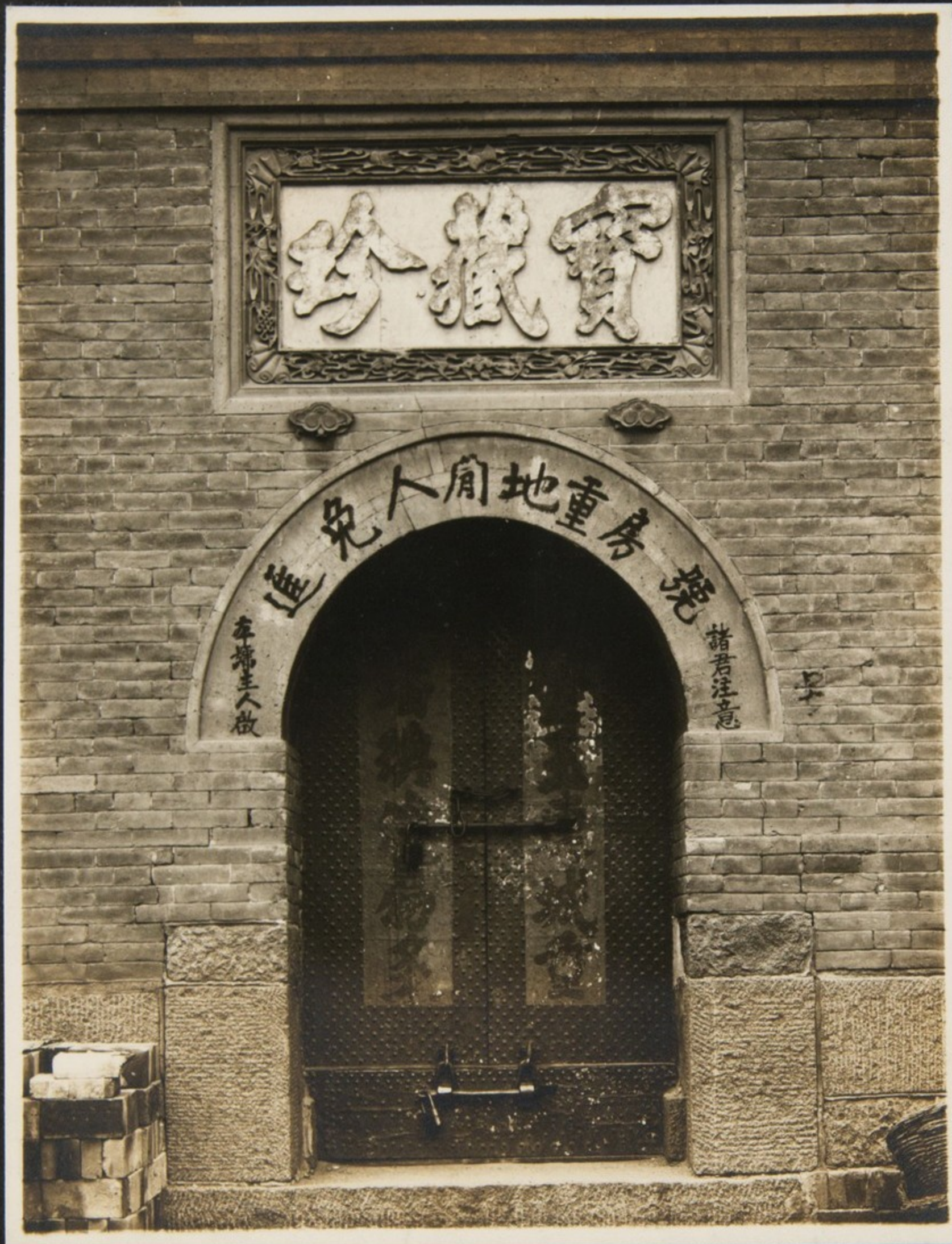


◎ 貴金屬の保管

(北滿)

當舗の御客様の内には相當階級の顔振れも仲々多くその入質品は重に裝身具の金銀細工品で、これは特に倉庫でなく經理(支配人)室備付けの滿洲式金庫に保管される。帳簿方、出納方、鑑定方、書記、倉庫方等數多い店員の内でも最も信用あり確實な相當年輩者がその監視人として任用されピストル携帶で晝夜頑張つて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 倉庫の入口

(北滿)

店から裏庭を抜けると倉庫がある。「流通天地大精神」とか『接續國家眞命脉』の業々しい對聯が貼られて居る煉瓦建の倉庫は當舖の最も重要な處で、『號房重地閑人免進』の文字通り嚴重に取締られ火氣は絶對に近づけぬ鐵則である。此の嚴重さが金融のみでなく財産の保管場所としても滿洲では重視せらるゝ所以である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 倉庫の内部

(北滿)

風呂敷包や麻縄で縛られた典物は見上げる程高い倉庫の天井近く棚一ばいに積重ねられて居る。そして『千字文』の字順に番號を附して整頓された間を高梯子で薄暗い燈に手際よく出し入れされる。當票(質札)は絶対の證據で『認票不認人』と明記されてるやうに、人より一枚の札を認める處に未だ地方の戸籍や警察の制度の不備さが覗かれる。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 銀行の兼業

(北滿)

『裕國便民』の文字通り利子の高低が直接庶民の生活に影響するため社會政策として利下げの強制をさした程、質屋は舊時代には金融機關として重視された。今でも大當舖は資金や信用の關係上有力なる背景を必要とされ、大資本の銀行、錢舖(兩替屋)燒鍋(造酒屋)等が兼營してゐる向が多く、事變前各官銀號が『官當』と稱して兼營したのがそれである。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 估衣舖 (北滿)

どこも同じやうに質物の主なるものは衣類で毛皮や装身具等がこれに次ぐ。従つて流質物も着衣類が多く大當舗では附設の估衣舗を兼營してこれを捌く。新らしい既製品や反物迄も加へて『質流品廉價賣出し』の看板の下に需要者を吸収する事は日本と同じで、既に立派な呉服店の態をして居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 街の質屋

(北滿)

質屋には官許を得た當舖の他に資本の多少に依り小規模な質舖、押舖の名があり、支那町に隨所に見る『當』の招牌も今では判然した區別はされぬが極く短期な零細な貸出も行はれて居る。看板の形は本來は『金銀が手に入る』と云ふ偶意から將棋の駒の形をとつて四角の兩上隅を落したもので、赤地や黒地に金文字で『當』と書いてある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 國境の望臺

(興安北省)

此處に來ると蒙古も放牧やオボの詩に夢見る牧歌的存在でなく、緊張した武裝された國境線の現在である。一里幅計りの緩衝地帯を界に外蒙と對峙する望臺、熱の夏寒の冬、寸時も離さぬ雙眼鏡には何が映されるか、雨？風？ 唯水草を渉る風のみが國境も知らずげに西に東に無限の草原を疾走するのみ。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 塹壕の跡

(興安北省)

滿洲里郊外遠く往年露支紛争の折に築かれた塹壕の残骸である。唯見る坦々たる果なき草原を縫ふ塹壕の跡には長閑かに放牧の群が水草を追ふてゐるが、境を隔て、秘境外蒙に接する此邊りには『アジアの嵐』を孕んだ龍巻が何時この静境を破る響をこだまするやら、心なしか眼界のつくる邊り幽かに一沫の妖雲の漂ふを見るのみ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 草原の旅舎

(興安北省)

蒙古旅行は今こそ爆音を立て、何處でも通れるが時變前迄は政治的にも難行であり旅も苦行であつて、重大任務を帯びた幾多の人々が蒙古潛人に如何に尊い犠牲を拂つたか。黄昏迫る頃、穴居に等しい旅舎の暗い燈の下に單座し往年の碧血の跡を憶ふ時、地圖を辿る苦闘の面貌など想起され果てしない追憶にそゞろ涙ぐまる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 蒙古の警察官

(興安北省)

阿爾泰<sup>アルタイ</sup>面と云へば地圖には相當大きく誌してあるが蒙古包二十餘位の小邑で、新巴爾虎右翼旗に屬し今は王道治下に昔ながらの生活をして居る村である。さゝやかなる包に嚴然と建てられた滿蒙兩語の警察署の表札とその側に整然と並んだ官吏の偉容、如何にも蒙古らしい原始的な警察官の姿に微笑まれる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 蒙古の小學校

(興安北省)

滿洲國となつてから蒙古人教育を奨励せしめたため向學熱も盛になり小學校が八十を數へ中學校迄も出來た。主として實業の實際教育を施し日語や滿語も課せられてある自然淘汰の搖籃にはぐまれた頑健な體軀、眉宇に漲る父祖傳來の慍悍さ、この青少年が鐵騎よく中亞に及び一世を震撼せしめた成吉思汗の霸業を回想する日、歴史は新しき彼等に何物を教へるであらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎羊毛の運搬

(興安北省)

呼倫貝爾地方<sup>フリンバイル</sup>一帶は國內でも地味肥沃水草豐富のため放牧に適し、羊毛は第一の生産地で主として海拉爾に集散せられる。在來は羊肉及毛皮用として飼育された關係上羊毛は副産物として取扱はれ概して品質不良であつたが現在は着々その改良に従事されて居る。今刈取られた計りの羊毛が裝填されて送らるる處である。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 燃料の製造

(興安北省)

苦熱に喘ぐ夏が過ぎると秋を迎へる間もなく蒙古には骨を刺す嚴寒が訪れる。永い冬季をつなぐ燃料は彼等の生活に尊い必需品で貯藏された牛糞は財産の一つとされて居る。この積重ねられた燃料は牛糞と草を泥土で煉炭のやうにねり固めたもので、白露の人々が造るやゝ進歩した體裁のものである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 克魯倫河畔

(興安北省)

滿洲里から阿爾泰面に車上の人となり緩やかなスロー  
プを越え大草原を疾走する途上ふと克魯倫の河沿ひに眼  
に入つた畫題である。静かな六月の晝下り、河岸の水揚  
車は緩やかに廻り繋かれた扁舟は水面に微動さえも映さぬ  
静けさで、炎暑のうち一掬の涼味をたゞへるあたり、昔  
を物語る歴史のあとも大自然と共に融和された悠久その  
ものゝ境地である。

(印畫の複製を嚴禁す)



● クドロン  
克魯倫河の漁撈

(興安北省)

蒙古人は昔から宗教上の關係で漁撈はしなかつた。  
呼倫湖フロンや貝爾湖バイルを中心とし附近の河川の魚類が市場に出  
たのは露人が始めてからで今では各所に漁場が設置され  
企業化されて居る。圖は克魯倫河畔の漁場で一般に簡單  
な舊式な手法であるが今では地方一帯の産額が相當に上  
つて居り此邊は主として鯉鯪等が獲れる。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 香

苘

(興安北省)

錦のやうな袋に大切に納めて腰に下げて居る香苘は蒙古人の日常生活になくはならぬ装身具である。香苘は文字通り香のある煙草で訪問の折や途上で互にそれを交換して香を嗅ぎ隔意なき挨拶を交すのである。商用にでも來たらしい二人の朴訥な挨拶の儀禮は如何にも原始そのもの物腰である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 虎林の碼頭

(濱江省)

五月初旬になると冬の間閉された北滿の河川に流氷がなくなり哈爾濱からの船が漸く虎林の碼頭に着く。途中の町々の便りと商品を積込んで十月初め迄船艀の出入が續く。先頃迄匪禍の不安に動揺しがちな町も漸く落付いて、明るい陽光が町の隅々までも沾ほし今では脂粉の香さえも漂ふ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 河沿ひの町

(濱江省虎林)

虎が棲んだ地方なので「虎林」の地名が生れたやうに昔は狩獵を生活とした遊牧民が居つた舊い町で、初め呢噶口と呼ばれ光緒年間縣城設置と共に虎林と改稱された。烏蘇里河を隔て蘇聯イマン市と對する江岸の彎曲に並んださゝやかな町で、人口二千二百餘、縣公署あり對岸の山の下はイマンの町である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 虎林の街

(濱江省)

阿片と賭博と密輸と揃った變則な繁榮を續けて來た虎林は商工業の見る可きものなく、縣内も北陝によつた僻地で人口稀薄の上永い間匪賊に悩まされ住民も縣外に逃避せるもの多く漸く今から第一歩につく町である。然し治安の確保は地理的に重要なこの町に進展を齎らす日が來ると思ふ。圖はその中央通。

(印畫の複製を嚴禁す)

◎ 烏 蘇 里 河

(濱江省)

烏蘇里河は黒龍江の右方支流で、左右兩側から蘇滿兩國の廣汎な地域を潤ほす多數の小河を擁護しつゝ、永い間の變遷の歴史を湛えて悠々約十萬平方料の水域に君臨して居る。圖は虎林沿岸より對岸イマン市を望めるもので界された萍々たる江水をはさむ國と國、江面に映る船影の静けさのうちにも心なすか重苦しく迫るものを覺える。

(印畫の複製を嚴禁す)

昭和

年

月

日

據軍機保護法被接收

岩井記



◎ 罌粟の栽培 (濱江省倒木溝)

罌粟の栽培は烏蘇里地方農作の主要なもので、栽培地は既耕地より隔つた山丘地方に多く相當區域も廣く、傍ら荒蕪の高地を開拓しつつ移動して行く。四月になると各地から萬を算する労働者が集り相當額の産出を見たが、事變後は栽培區制限のため産額が減少されて居る。圖は倒木溝附近の畑の一部である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 鮮農の水田 (濱江省四道河)

鮮人の出稼ぎは實に北滿開拓の先驅車で、その忍苦と農作技能は着々効を齎らして北の邊陲迄進展されて居る。此邊の住民は多く蘇聯方面から越境土着せるもので鳥蘇里沿岸方面から低地を追ふて孜々として鋤犁を下して進む、耕作の主ものは米作で陸稻もあるが大部分は水田で治安の工作与共に此種の移民は益々有望視されて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 蘇聯國境監視所

(濱江省)

船は蘇滿國境松阿察河スウマンの流れ僅か十余米幅の國境線上を走る、夜來不法の射撃に神經を尖らした一行は對岸の廣荻にふるゝかと思はるゝ船の中に靜かな緊張を續けて行く。手にとるやうに見える草原の間に建てられた造營物はケ、ペ、ウの國境監視所で、何となく心なき雜草の戦きにも氣が置れる。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 興凱湖の漁撈

(濱江省)

滿洲沿烏蘇里の河川沿地方及び興凱湖一帶住民の三分の一は漁撈に従事して居る。四月解氷と共に始められ鮭が烏蘇里河を溯る季節が書入れて、特に秋鮭の大群が遠く松花、黒龍の兩江支流に上る頃は收穫二十萬尾と云はれ一ヶ年の生計費が生れる。興凱湖は水溫高く種々の魚群豊富で夏期間散の折はエビ漁が行はれる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 興凱湖畔

(濱江省)

烏蘇里河から分れた松河察河が興凱湖に注流する湖畔の蘆荻繁茂する湿地の中に戸數十戸足らずの龍王廟の邑がある。興凱湖はその北三分の一に兩國境界線あり、北方蘆荻叢生する地峽を隔て、通稱小興凱湖と呼ばれる東西に長い小湖達田庫湖がある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎興凱湖 (濱江省)

北滿の東北隅、南北九六浬東西平均五〇浬と云はるゝ興凱湖は支那本土の洞庭湖と比べらるゝ大湖で、地變による陥没湖らしく附近の河川を集め再び烏蘇里に注流される。渺々たる水面は海の如く、群り來る白雲は湖面を覆ひ一沫の涼氣波紋を渉り漁舟は揖を止め靜寂にひたるあたり正に絶好の畫である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 蓮江口碼頭

(松花江岸)

佳木斯の對岸五支里遡る處に蓮江口あり、此處より北に百支里餘奥に入れば鶴立崗炭坑あり、蓮江口とは石炭輸送鐵道によりて連り、此處は貯炭場で且つ輸出港である。鶴立崗炭坑は阿片栽培のため耕作の折偶然發見せられてから今日の企業化を見るに至つたもので、炭質良好露天掘で採掘された石炭は主として北滿各線等に送られ埋藏量六億噸と云はれ將來を約されて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)

◎同 江 (松花江岸)

廣漠たる平野を流るゝスンガリーの河沿ひ、江水を湛へた處靜かに倒影を映して居る一筋町それが同江である地形上松花江と黒龍江の合流點に近く、松、黒、烏の三大江の通航船の寄泊地として最も有利な條件にある地點で縣公署もあるが未だ一向に振はず物淋しい眠つたやうな田舎町である。

(印畫の複製を嚴禁す)

昭和

年

月

日

椽軍機保護法被接收

岩井記



◎ 曳き船

(黒龍江)

僅か百噸足らずの船が幾倍かの大きさの船を曳きながら緩やかに海のやうな江面を滑るやうに走る。行違ひにふと双眼鏡をのぞくと船の上には大砲が積込んである。よく見ると物々しい武器もあれば碧眼の兵隊も居るのだらう、如何にも國境の河らしい情景だ。黒龍江の烏蘇里河近くで拾つたスナップである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 江岸の廟

(黒龍江岸)

船の中でけたゝましい爆竹が鳴る煙火が擧げられる、  
デッキに出ると船客は皆跪座して江岸を禮拜して居た。  
見れば碧翠滴るやうな江岸の濃緑の中にさゝやかなる海  
神の廟が見える、江を往邇する船客は必ず此處にさしか  
かると途中の安隱息災を祈願感謝するのださうだ。撫遠  
を去る間もなくの地點である。

(印畫の複製を嚴禁す)

昭和

年

月

日

據軍機保護法被接收

岩井記



◎ 撫遠の遠望

(黒龍江岸)

撫遠は黒龍、烏蘇里兩河の合流點に近い町で、山を背にして靜かに江岸に臨む港町を遠く船中から眺めると日本の旅で見た入江に圍まれた漁村の風光が想出される。縣公署はあるが小さい漁村で、裏山の中腹に見える一條の柵は露支紛争の折の血醒い鐵柵の名残りである。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 饒河の街

(烏蘇里江岸)

道幅の狭い泥濘と砂塵の街路に屋根の低い商店が両側に並んで居る、チリ／＼と焦げつくやうな日ざしを受けた軒並、道端の白い日覆に直射をさけて茶でも燻つてゐるらしい二人の老頭兒ののんびりした顔、餘り人にも知られなかつた奥北滿のからびた街にも今では王道の陽が照り映える饒河の商店街の眞晝時である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 饒河江岸

(烏蘇里江岸)

饒河は滿洲國沿烏蘇里地方で最も活氣のある町で團山子とも云はれ、烏蘇里航行の船は必ず往還に續を休める港で縣公署あり人口三千餘、冬期は富錦虎林に自動車の便がある。此處で捌かれる商品は阿片蜂蜜等が主で附近の村落からは大豆、玉蜀黍等が耕作される。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 鮭の漁場

(烏蘇里江岸)

北滿の奥にも春が訪れる頃になるとソロ／＼烏蘇里河に鮭の大群が上つて来る。鮭の漁期に入ると江岸一帯の漁夫が三倍の數に昇り、彼等には附物の『娛樂』の設備さえが必然のものゝやうに出來て賑ふ。收穫は春よりも秋が多く約二十萬尾と云はれる。これはその中心地海青鎮漁場で江岸の魚籠は魚を貯へるものである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 虎林縣公署

(烏蘇里江岸)

虎林の町の一角「虎林縣公署何々」と嚴めしい標札に似合はぬ古々しい門構と平家の支那家屋、門前に薄汚い軍服に眞黒な平べつたい顔骨の高い兵隊の鹿爪らしい面が立つてゐるあたり、どうやら縣の懷具合ものぞかれる事實縣内は廣い割に未墾地が多く人口が少く、永い間匪賊が跳梁して居たので内容が充實される迄には先がある。

(印畫の複製を嚴禁す)

昭和

年

月

日

據軍機保護被接收

岩井記

● 松阿察河

(濱江省)

松阿察河は烏蘇里河の支流で興凱湖に通ずる蘇滿の國境を劃する線で、兩岸は濕地多く蘆荻繁茂し河はその間を時に廣く或は狭くなり複雑な線を畫いて迂曲廻走して居る。淺瀬の多いのと夏季は霧で惱まされながら興凱湖通ひの汽船は航行するが、此處を通ると寧ろ國境と云ふ雰圍氣がより重苦しい壓迫を覺える。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 祭に集る天幕 (興安西省大板上)

喇嘛廟の祭典は年中行事として大低年二回行はれる。祭の日が来ると今迄遮るものもない草原の中に四方から螺集した人々で包や天幕の歡樂境が現出され、廟の周圍は僧侶の讀經と善男善女の奇異な祈禱と香煙の渦に包まれる。圖は興安西省大板上の祭典に集ふ天幕の賑やかさである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎喇嘛僧の群

(興安西省大板上)

色の褪せた黄袍の裾を曳き、紅頂のある黄色帽に失はれつゝある儀容を正した老、壯、少の雲衲共が丹碧の殿堂を後に、今日の佳き祭典に集ふ群衆を相手に嬉々として影の淡い法悦にひたつて居る。口にして居るのは大喇叭で長さ二間に及ぶものもある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 怪異な跳鬼

(興安西省大板上)

數限りなく立並べられた長旒と大旆と幡旗、中央に飾られた咒符の裝飾、その間を嚮嚮を頭にのせた怪異な假面の跳鬼が喜怒何れとも見分けられぬ面貌で、牛、馬、鹿等のグロテスクな獸面の仲間を交へて旋廻跳舞する頃が祭典のクライマックスである。圖は踊り終へた跳鬼の一隊が息ついた處である。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 鬪馮の舞

(興安西省大板上)

大太鼓、小太鼓、銅鑼、大小の喇叭等、音の強烈な滂調の伴奏が騒々しい中を薄氣味の悪い鬪馮の跳鬼か躍り出した。道化役者のやうな間の抜けた足どりで可笑しく踊る所作を見て観衆は譯もなく喜ぶ。何となく時代に置去られる者の狂燥曲を聞くやうに想はれる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 裝飾された咒符 (興安西省大板上)

一しきり祭典の行事は終つた、金銀や丹碧に飾られた  
鬮腰の付いた三角形の屋根型の飾物は祭典の中心となつ  
た悪魔退治の咒符である。世のあらゆる悪魔は讀經でそ  
の中に封込められ祭典の終りと共に焼捨てられるのであ  
る。積重ねられたのは太鼓で縦に柄の付いた處が變つて  
居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 餘興の力技

(興安西省大板上)

祭典の餘興として觀衆を尤もアツピールするものは角力である。短かい上衣と緩やかな袴をつけた二つの肉塊が東西より出て活佛に合掌の挨拶をする、そして土俵のない芝生で倒れる迄渾身の力を漲らして争ふ龍驤虎蹲、日本の柔道に似て洗練されぬ野趣の横溢した處に面白味がある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 優勝した力士 (興安西省大板上)

戦は終つた數度の健闘に息する暇もなく最後に選ばれた見るからに逞しい慍悍な壯漢、きらびかに飾られた銀金具打つた名譽の上衣を着用した悠然たる不敵の面魂、彼は今日の榮ある優勝者なのである。力士は多く僧侶から選ばれるが今では半職業的のものもある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 祭の馬市

(興安西省大板上)

喇嘛廟の祭典には必ず市が開れる。年二回の祭典を目的に遠くから集つた蒙古人や滿洲方面の商賣人の手で急造の大幕市が設けられ物々交換が行はれ、雜貨、毛皮、家著等が主として取引される。祭が終れば金を懐にした人々は蒲鋒馬車に揺られて又草原の遠い旅路につくのである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 天幕の露店

(興安西省大板上)

祭典の雑踏を避けた一隅に種々の天幕露店が開かれる、参詣旁々金儲けに來た人々の群であらう。さゝやかに並べられたどうやら日本品らしい陶磁器……大方は遠く草原を越えて來た参詣の人々が物珍らしさに留守居の人々を喜ばすお土産となるのであらう

(印畫の複製を嚴禁す)

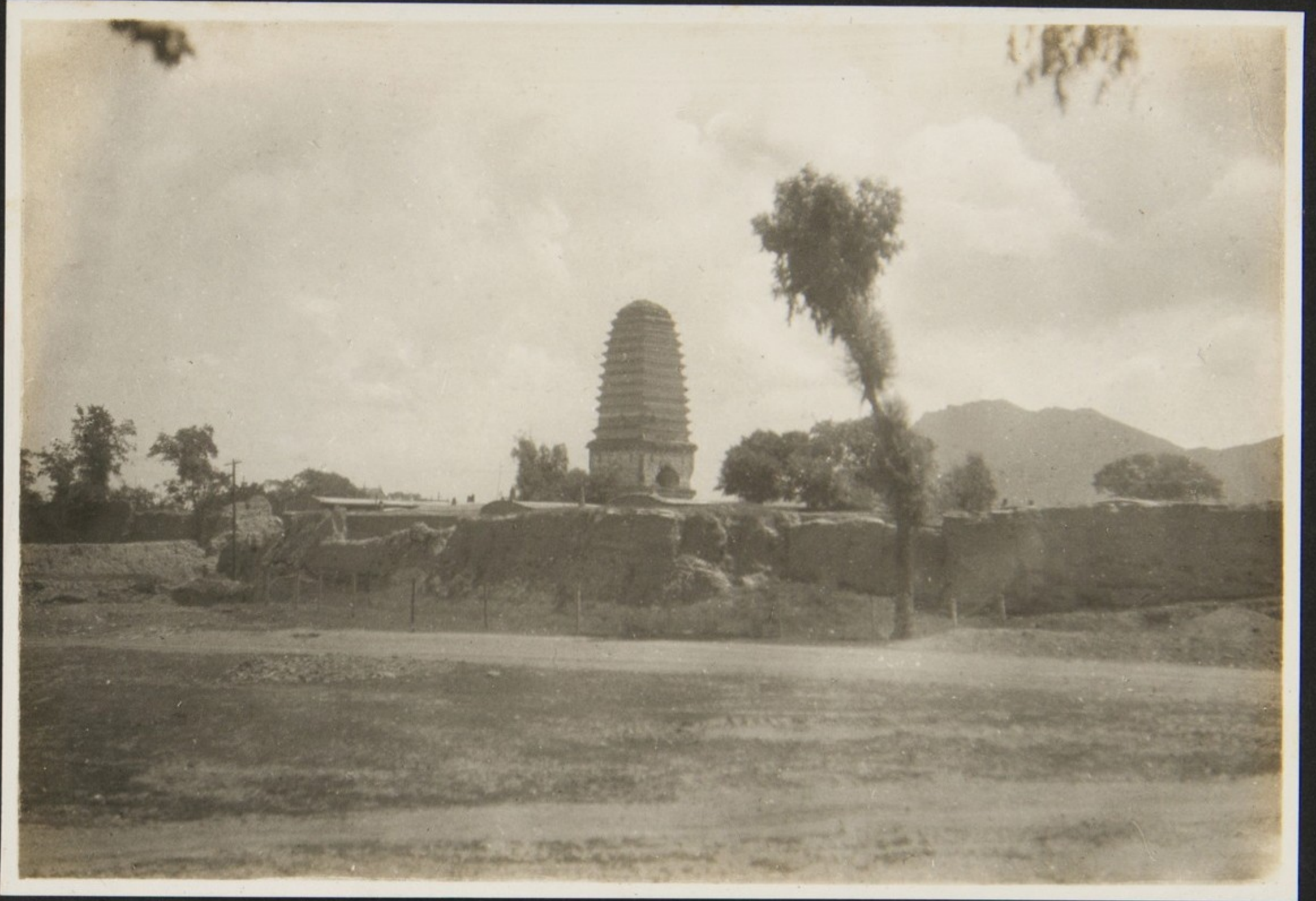


◎ 祭見物の娘

(興安西省大板上)

指折り數へた祭の日が来た、薄化粧する頃の娘心にお祭りは嬉しい幾日であり懐かしい想出でもある。明け暮れ寂しい草原に夢を結ぶ蒙古娘に祭は胸をおどらす憧憬であつた。両親に連れられた戀知る頃の娘さん、參詣も終つたらしく何を求めるのやらさても楚々たる姿よ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 古塔を望む

(朝陽)

朝陽の三座塔は遠く遼金時代に建設されたものと傳へられその盛地名となつた程有名であつたが、櫛風沐雨幾星霜今は二基を残すのみである。

その昔驛々に聳える塔は旅路を迎へる人々の唯一の道標とされたもので、振分けの負荷も重い旅人達が薄暮迫る頃遙かに群鴉繞り飛ぶ塔を隱見した折の喜びが、今も夢のやうに立つ塔の姿に偲ばれる。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎城 外 へ

(鉦 縣)

灰色の塵埃にまみれた城壁は嚴然として地方に君臨した昔日の偉容もなく、遼西の政治經濟樞要地として盛時をうたはれた殘骸のみが青史をよそに悠久の日に曝されて居る。

麗らかに晴れた城壁の外側を、今しも一群の家族を積んだ馬車は土煙も軽く城外へと馳けて行く。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 郊外風景

(朝陽にて)

赭土の路に映り返される陽光  
灰色の塵にまみれた土壁の香  
楊樹と柳條の投げる長い斜影  
遠い鶏の聲も人の囁きさえも聞きとれる静寂の中に、  
洋書のタツチを見るやうな感觸の誘惑にふともものされた  
一枚、朝陽郊外秋浅い日の午後。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 朝陽の町

(朝陽)

朝陽は遠く晋末五胡十六國時代から東蒙の古都として聞えた町で、市街は大凌河の左岸にあり、昔周圍四キロ半に渉る煉瓦壁に威容を示した城壁が廢頽のまゝ残されて居る。現在人口二萬五千、地方經濟の中心で人馬の絡繹は縣公署前通りの景である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 大 凌 河

(朝陽附近)

遠く熱河の奥を發し蜿蜒と遼西の野を曲折迂走した大凌河は渤海の海に注ぐ。圖は朝陽の附近を走る支流で、遙か幅廣き河床を隔て、眺めると東は麒麟山脈南は鳳凰山脈あり、稜々たる岩骨に描かれた山皺の起伏を褐色の河床に残された砂洲に映じて流れる様は雄大である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 憩

い

(赤峰にて)

焦きつくやうに烈しく照りつける残暑の陽をさけて土壁の小門に汗を拭ふ野菜賣りニイヤ、側らに腰を下して話かける老頭兒、長い煙管からは紫の煙が屈托もなげに舞上る。聲高な四方山の談はいつ迄續くやら、さても長閑なシーンよ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 赤峰の街

(赤峰)

赤峰は遠く乾隆の初め蒙古貿易の最前線として開市せられ、地形上農牧地帯の交界地として一時殷盛を極め、其後幾多の曲折を経て近年迄は衰退を續けて来たが今は漸く恢復せられ、人口約三萬、皮革、甘草等の取引行はれ地方集散地として進出して居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 紅い山

(赤峰)

赤峰の名は蒙古語名烏蘭哈達(紅い山の意)から轉改されたもので、河を隔て、望む東北の紅山は全山紅の岩質に蔽はれ、特有の紅い夕陽に輝り映える頃遠くからこれを望めば眞紅に燃ゆるやうな處から此の名が生れた。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 赤峰郊外

(赤峰)

赤峰は西遼河の上流附近にあり、古來熱河地方の中央に位置を占め經濟の中心地であつた。東北と南に山を控へ西南は一望の平野あり、往時松州及松山縣名を附せられた處を見ると昔は附近に松樹多かつたらしいが今は跡方もなく泥の町である。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 祭の芝居

(烏丹城にて)

ふと烏丹城の町で廟の祭典に出遇つた。けぼくしい  
隈取りと紛装で鋭い聲を張上げる支那芝居的一幕、立並  
ぶ露天の汚い食堂と雑貨の陳列、嬉々としてその間を縫  
ふのんびりした群集、覗き眼鏡に時の立つのも知らぬげ  
である。

烏丹城一帯は地味瘦薄で特記すべき生産がなく、無盡  
藏と云はるゝ甘草のみが此處を中心として多く輸出され  
る。

(印齋の複製を嚴禁す)



◎ 東門を望む

(林 西)

林西はもと巴林右翼旗に屬し、察罕木倫河支流北岸の平地にあり、東西は丘陵に抱かれ南は平野、北は谷地となつて居る。周圍二支里半の土壁を繞らし東西南北の四門がある。巴林の西に位置を占めてゐるため林西の名が起つたのである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 中央大街

(林 西)

東西南北の四門を十字に結ぶ街衢は林西の主要幹路で中央大街と云ひ、更に左右二條の小街があつて劃然とした町である。元來が商業地でなく寧ろ對蒙上政治及び軍事の重要點として存在した處であるが、近來は漸く交易も朽けて活氣を呈して來た。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 林西の町 (林西)

林西は北東は直ちに蒙古地帯に展開し、地勢上西は經棚に望み南は烏丹城を經て赤峰に通じ各地との交易地で、近時開放せられた接續の蒙古地帯は地味肥沃のため家畜集散の地となり急激な發展をしつゝあり、移出品は畜産、羊毛、獸皮、甘草等である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 清真寺内部

(林 西)

清真寺の堂内は一般に裝飾らしい裝飾がなく、こゝも普通の洋燈が中央の壇上に吊され後壁には紋様の亞刺比亞文字の額が掲げられて居るのみである。回回教徒は支那には珍らしく幹淨カンゼンを愛する人々で堂内には必ず洗身センゼンに用ふる清水が供へられて居る。嚴然と並んだ僧侶とアラビヤ文字でのみ綴られて居る教典キョウテンはよく頑迷と云はるる信仰の内容を物語る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 清 眞 寺 (林 西)

片手に教典、片手に劍のマホメットの回回教（一名イ  
スラム教）は遠く西域より遙かに東邊滿洲に來り布教せ  
られてから百數十年の歴史と現在約十萬の信徒を有す  
る。教徒は回民と云はれ豚肉を吃せず他教徒と交らず、  
牢固たる團結の下に嚴格な宗規を遵守して居る。清真寺  
はその一般寺院名である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 大板上を望む

(大板上)

大板上は興安西省の林西より東方百六十支里の處大興安嶺の一部なだらかなる高原地にあり、元巴林右翼旗の所在地で地方稀に見る整つた町である。年一回催される廟祭には遠近より螺集する善男善女で「牧民市場」が開かれ、静かな町も暫くは歡樂と雑踏に殷賑の日が續く。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 郊外のオボ

(大板上)

永い夏の日脚も傾きかけた郊外の黄昏時、遠くなだらかな丘陵を後に夢のやうに立つオボを遙かす涼風、蒙古の夕暮は靜かにも神秘である。オボは境界標識のためと宗教的な通靈機關として積上げられたものもあり、圖は後者で神靈の槍と使役する鳥とが供へられてある。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎老婆と孫

(大板上)

後生をお願ひに町の廟様に参詣した老婆であらう、盛装した孫らしいのを連れて嬉しさが皺にのぞかれる。蒙古婦人の服装は満洲人に似て寛長だが袖口は少し狭い、腰には銀鎖か紐でメタル様の物を下げ、靴は大低刺繡された長靴を穿き夏季は頭を布で巻く。

(印畫の複製を嚴禁す)



祭の日の大板上の街頭で見た老人の群、何を見入るのやら三人一様の額の皺には長閑な陽が照る。蒙古の男の衣服は滿洲服より寛濶で長い裾を帯で高くしめ上げ夏季は綿布冬は毛皮が用ひられる。皮製の長靴を穿き、嗅煙草、食事用小刀や箸入、煙管などの身廻り品を携へ多く念珠をかけて居る。

◎ 蒙古の老人

(大板上)

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 大板上郊外

(大板上)

去來する雲の脚も蒼空に凝して動せず、遮るなき漠々たる曠野を前に端然と起伏する大興安の連丘のたゞずまい、微動のけはひさえも感ぜられぬ秘境の眞畫時、狂燥と喧騒に繊細な神經を焦悴させる都會人には想像だも及ばぬ靜寂味であり嚴肅境である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 北岔子探金場

(間島省)

琿春から滿蘇國境の連峰を右に眺め琿春河の上流沿ひを北行すること四十里餘、濱江省に近い胡慮河附近に北岔子の砂金探金場がある。此處は附近一帶の河床を中心として昔から土地の人々の手で砂金を採集された處であるが、滿洲の探金企業化と共に現在は機械化され新しい方法で探金を續けられて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 採金の試錐作業

(北谷子)

綱曳きのやうな格好で四人の苦力が圓盤附パイプを廻すと同時に盤上の四人は鐵管を地中に打込む。これはインパイヤードリルに依る試錐方法で、地下の基盤に達する迄一尺宛沈下する毎にポンプにて地中の砂を上げ砂金の有無を試験する。最後に平均一立方碼の含有量を算出して價值が決定される。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 砂金探掘状況

(北畚子)

インバイヤードリルに依り試錐せられ含有量を算定され探掘價值のある箇所は探砂にとりかゝる。地表下二十四五尺の基盤迄掘下げられて含有砂は探出され態々洗鑛機にかけられるのであるが、この水溜りの土砂の現場を見るとゴールドラッシュを夢見るには余りに空想離れした感がされる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 砂金洗鑛機 (一)

(北谷子)

この洗鑛機はゴールドパンに依る淘金作業機で、探出された金含有の土砂は少量づゝパンの投入口である金網の上に入れられる、同時に上部のポンプの口から勢よく降下される水力とパンの自動的な水平運動によりて土砂は完全に洗はれ砂金は下部の銅盤面に沈下される。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 砂金洗鑛機 (二)

(北畠子)

採掘地からトロツコで運ばれた含金土砂が洗滌されつ  
つある處で、一旦洗はれて金網から銅盤面に沈下された  
砂金は更に此處にある水銀に吸収せられてアマルガムを  
作り、かくして含金土砂は完全に洗滌せられ、最低の盤  
上に残される。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎山の朝 (北畚子附近)

今の今迄大地を匍ふて居た朝霧もしつきり暗れて、此處老爺嶺の嶺つゞきの連丘は清々しい朝の陽が柔らかな光を投げて居る。

今日の仕事への仕度であらう牛の用意をしてるらしい農夫、道端に建てられた藁葺の家にも田舎らしい山村朝色の長閑さが漂ふ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 鮮人小屋

(北谷子附近)

丘地の勾配を利用して掘下げられ温突を据付けると簡易な住宅が出来上る。國境を越へて遙か北滿に移る鮮人の群は夥しいもので、隠忍と苦闘の中に孜々として地盤を突ひて行く努力は涙ぐましいものがある。この穴居に等しい陋屋は附近の採金場に働く彼等の生活状態である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 楊木溝江岸 (一)

(吉林省)

北滿特に松花江上流一帯から伐出される木材量は無盡藏と云はれ、吉林江岸に集るものにも年二十萬石余と算出される。伐木から運材、更に編筏にとりかゝり春季晴明の候と共に融雪の出水を利用して運くも初夏の降雨前には悠々たる巨姿を江面に浮べる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎楊木溝江岸 (二) (吉林省)

筏の大きさは凡そ二十本内外の長物が一節として編まれ、小は三四節より大は四十節も連結されて流される。頭棹の筏夫の音頭の下に十人近くの後棹の手が巧に繰られて江上を流るゝ偉觀は北滿の一名物で、數十里の碧潭を迂折曲走して吉林に着き解體される。圖は楊木溝江岸に擊留された筏である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 筏

(楊木溝江岸)

編筏が終ると小角材や板などで筏の上に小屋掛されて  
幾日かの假の起居が出来上る。筏上に立昇る炊煙に移り  
行く江岸の暮色を惜しみ、溪の鶯に誘はれて筏節を流す  
風流味はなくもがな、江水浚やかに煙る筏上の朝夕に江  
山水趣をほしきまゝにする筏夫の生活は一聯の詩のフィ  
ルムであらねばならぬ

(印畫の複製を嚴禁す)



●南陽驛

(北鮮)

國境を流る、圖們江を隔て、滿洲國の圖們に對し南陽がある。國際鐵道に連る日滿連絡最捷路が生れ京圖、圖佳兩線に通ずると共に北鮮の關所として急激な進展を遂げ、先頃迄人煙稀れな寒邑も今は人口二千餘、橋一つ境に朝鮮造りの驛舎を見るのも異つた氣分がされる。

(印畫の複製を嚴禁す)

◎雄

基

(北 鮮)

北鮮の最北部、滿、蘇境界に近い處に雄基港がある。  
往年間島、琿春地方物資の吞吐港として浦鹽と對抗した  
港で、人口二萬餘、京圖線完成と共に港灣も擴張せられ、  
地形も附近木材の集散に適し今後その輸出港として尤も  
期待せられて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)

亞東印畫輯第三百三十九回 (2)

昭和

年

月

日

樞軍機保護法被接收

岩井記

昭和

年

月

日

據軍機保護法被接收

岩井記

●雄基港

(北鮮)

漏斗形の港を包んだ丘陵の坂に沿うて建て並んだ町の姿、波隠やかなる灣内に繋留される帆柱の林立、雄基港は日本内地によく見る港町情景の豊かな町である。現在吞吐能力六十萬噸、石炭、木材、大豆等を輸出し、織物、穀類等を輸入して居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎雄基の街

(北鮮)

南陽から北鮮に入り車窓に映り行く滿洲を見馴れた物  
珍らしい相違に興味をそよる間を圖們江岸に沿うて進む  
と雄基に着く。京圖線の終點港羅津と、南の清津港と共  
に北鮮の三港として特に貨物の輸出港として今後の發展  
を囑望されて居る。圖はその賑やかな商店街。

(印畫の複製を嚴禁す)

亞東印畫輯第三百三十九回 (4)

昭和

年

月

日

椽軍事保護法被接收

岩井記



◎北鮮の陶器

(北鮮)

到る處に陶土に恵まれて居る北鮮地方では隨所に窯業が盛んに行はれ、特に會寧燒の名聲は逸品とされて居る。圖は碓基の町端れに拾つた陶器屋の店先きで、この日當りの良い軒先に並べられた陶器も何れは白衣の女の人々の頭の上に緩やかにのせられて歩く日が来るだらう。

(印畫の複製を嚴禁す)

◎羅津港

(北鮮)

嘗つて四十年の昔から全鮮第一の自然良港として認められた羅津の港灣は、一望の下に眺めらるゝ灣口に自然の防波堤をなす大草、小草の二島を前にして、東西北の三方の岬に圍まれた包擁力は素晴らしいもので、工事完成の暁には八千噸級の汽船を十數隻も繋留し得ると云はれて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)

亞東印畫輯第三百三十九回 (6)

昭和

年

月

日

樫軍機保護法被接收

岩井記



◎羅津の町

(北鮮)

— 躍る黒潮日本海も

庭の湖水よ一夜の夢路 —

音頭が物語るやうに羅津の港は天恵的好條件と地理的にも絶好の地位にある。未だ市街は物足りないが東支、拉濱、岡佳の三角鐵路に集散される物資は必ず此處を中心として吞吐される可く、町の繁榮も期してまつべきである。

(印畫の複製を嚴禁す)

昭和

年

月

日

樺軍機保護法被接收

岩井記

◎羅

津 (一)

(北 鮮)

滿洲國の出現から懸案の吉會線に換つて日滿連絡の京  
圖線が生れ、羅津がその終端港として選ばれると共に急  
速な工事の進捗を見て立派な若き港羅津が生れた。大連  
と安東とに結れた線が更に日本海から裏日本に連る一線  
を加へた事は、距離の短縮と共に日本海時代の將來が刮  
目される。

(印畫の複製を嚴禁す)

●羅 津 (二) (北 鮮)

二年前迄は北鮮の一漁港として淋しかつた羅津は、天然の條件と時代の趨移と更に地位的優越性と國策の重要性に恵まれて俄かに躍進された。現在人口二萬五千餘、日々に殖え行く建築物にもその發展振りが期待され、將來王座大連と拮抗しそれを揺がす日も考へ得らるゝであらう。

(印畫の複製を嚴禁す)

亞東印畫輯第百三十九回 (8)

昭和

年

月

日

據軍機保護法被接收

岩井記



◎ 稷 穂

(北 鮮)

北鮮の産業は地勢上林野面積廣く兎角農業は遅れ勝ちであつたが、近年漸く盛大になり粟、大豆、麥類、水稻等の生産行はれ、その内粟は彼等の生活必須のものだけにその主位を占めて居る。重たげに垂れた粟の房、見渡す限りの揺ぐ穂波は今收穫を待つて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 特産の積出

(山城鎮)

背後に肥沃な大平原を控へた山城鎮は、特産の出廻り盛んで附近一帯の物資の集散地であると共に、市街は東山地方唯一の都市として商賈櫛比し頗る殷盛を極め奉吉沿線中の重要な町である。人口三萬、これは驛構内に積出された大豆の山である。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 厳めしい糧棧

(山城鎮)

東邊道一帯は交通關係からか由來匪賊で有名な地方であつた。山城鎮の大きな糧棧は大抵雜貨商や宿屋質屋等を兼業して居るため客の出入も多く彼等の好餌となる事が多かつたのでその警備振りも物々しい。城主の居城にも似た儼然たる牆壁と武裝された望樓はよく事實を物語る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎海龍の街 (海龍)

海龍は地方での古い歴史のある土地で縣公署もあり商業も相當に賑つて見えるが、地形の關係から山城鎮と朝陽鎮の間に挟まれ兎角兩者に押され勝ちで現在市況の活氣は之等に及ばぬ。圖はその商業地域の本通り。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 城門の入口

(海龍)

海龍縣は東豊、西安、西豊の各縣と共に清室の初期に圍場(御獵場)として扱はれて居つた處で、海龍は光緒四年初めて開放せらるゝと共に總官衙門を置かれ今日迄續いた町である。

冷たい北滿の冬は崩壞された歴史を土壁の姿に残したまゝ、城門には枯草が寒風に戦ひて雪に凍付いて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 輝發城址

輝發城址は吉林省盤石縣と奉天省輝南縣との縣界、朝陽鎮より東北方輝發河左岸に臨んだ丘陵にある。尋ねれば城壁の跡とおぼしき小高き蜿蜒りに昔を偲ぶのみであるが、嘗ては明代より清の初め頃迄の間、北邊から來住した扈倫種族の覇になつた輝發國の舊都の墟なのである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 輝 發 寺

輝發城跡の丘の背面の勾配にさゝやかな寺廟があり、  
もその儘に輝發寺と稱へられる。國破れて山河あり、眞  
新らしげな丹碧はその昔遠く黒龍蒙古地方より來り暫し  
制覇の夢を結んだ強者共の跡を識るやしらずや、雪に被  
はれた薨には未だ淡い春の登音さへも聞かれぬ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 郊外の雪景

(朝陽鎮)

朝陽鎮は最近まで瀋海鐵路の終點として知られた處、地勢上商業都市として目覺しい發達をした新興の町で、過去に於て殆んど全滅の被害を嘗める事兩三回よく起生回復をして今日に至つて居る。交通の要路と云ふ好條件は物資の集散と共に今後の發展を期待される。圖は雪に彩られた郊外の景。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 雪の村落

(輝發城附近)

たゞ見る白皚々たる雪野原、眞只中を一筋に遙か消え行く轆の痕、薄墨色の空模様の彼方に點綴する村落の點景、世の塵も屈托もなく白一色に自然の刷毛に淨化されたキャンパス、舊蹟輝發城址を中心とした風景だけに一しほの眺めである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 柳垣のある路

(盤石)

柳條をくみ合はした生垣のある茅屋が静かに兩側に續いてる路次、トゲくした冷たい感觸のうち何となくうら枯れた淋しさがある。やがて柳に柔らかな芽が萌出る頃は、この山間の町端れにも春が訪れて、悩まされた匪賊の昔語り、今日の樂土を讚へつゝ、苦い思出も語り合はされことだらう。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 盤石の城門

(盤石)

盤石は吉林省の最南端、輝發河支流の北岸にある舊名磨盤山と云はれた町で、舊吉海沿線中では主要な物資の集散地とされて居た。人口約二萬餘、事變以來匪賊の災禍を避けて遠出した商人も漸く歸來し商況も回復しつつあつて、城内は町並も道路も整然とされた一寸した町である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 琿春の城門

(琿春)

琿春から三里を隔てる蘇聯との國境方面には今も怪しい妖雲が漂ふ。此地方は地勢上山岳地帯で且つ國境線に近い處から共匪の鎮壓に悩まされて來たがその掃蕩は相當困難な事と云はれる。町は人口二萬餘、何となく沈滞気分がされる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎町の書店

(暉春)

國の文化は教育の普及がそのバロメーターとなる。王道治下の恩浴は普く率土の濱にも及び遠く邊陲の地にもそれが覗かれる。暉春のゴミくした薄汚い陋巷の軒並にふと國定教科書の看板を見た時、新らしく拓け行く若い國の呼吸が聞きとれるやうで嬉しかった。

(印畫の複製を嚴禁す)

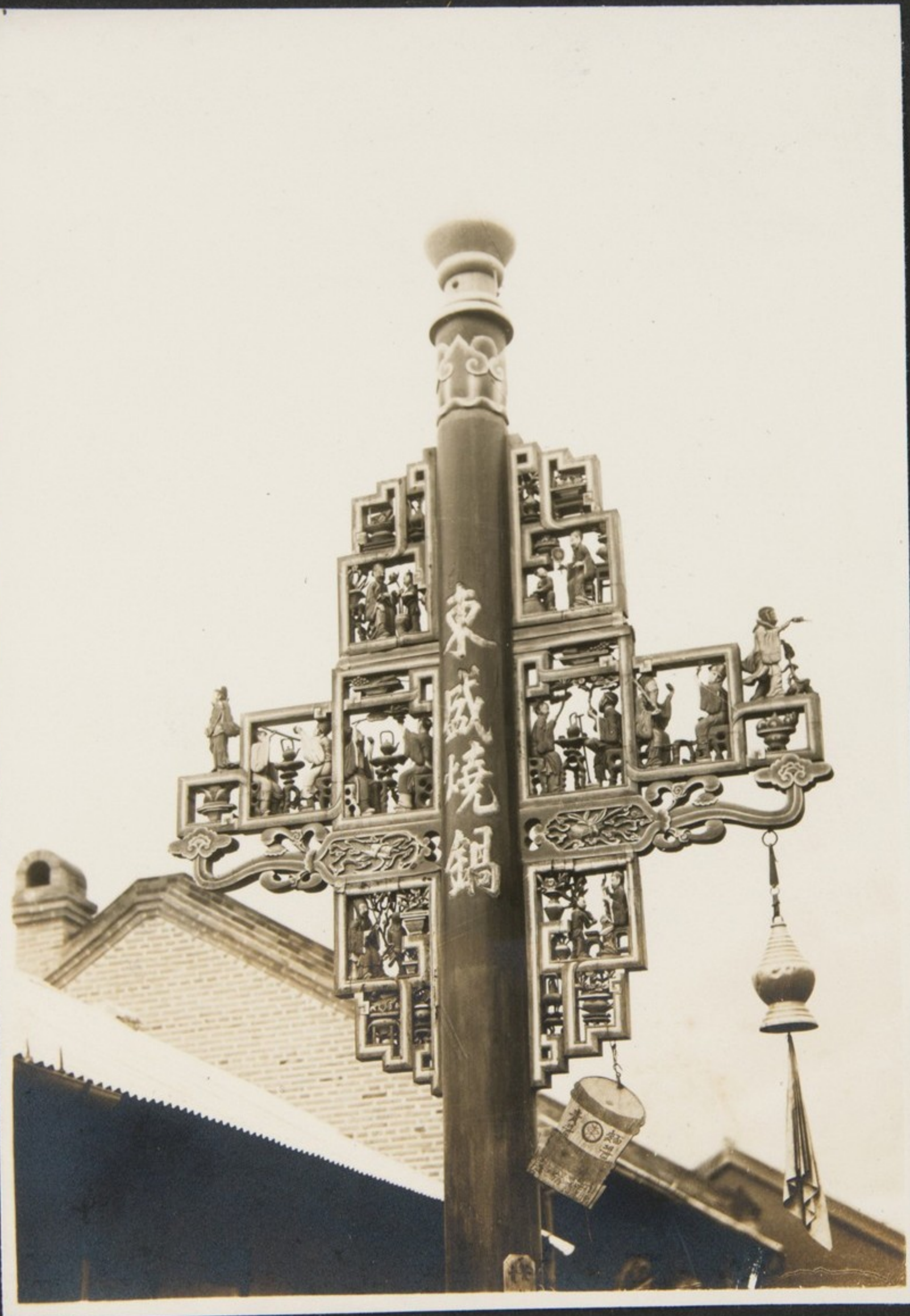


◎ 琿春 城 内

(琿 春)

琿春は元來間島地方中では最も早くから鮮人の移住を見た土地で、清國時代は地方唯一の商埠地として對浦鹽貿易に一時は殷盛を極めた事もあつたが、大正十一年露支國境封鎖以來貿易が杜絶されて今は昔日の面影もなしさびれ方である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 燒鍋屋

(琿春)

誇張した文字の好きな古い支那の姿がその儘に残されて居るやうな業々しい此の招牌は琿春の町で拾つた支那焼酎屋の看板である。此種の華麗な裝飾や美辭麗句を列ねた看板も、若い滿洲では他の因習や舊慣と共に自然に影を潜めて行くものゝ一つで、今は珍しいものとなりつゝある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 頌 德 碑

(揮 春)

永い歴史の間勸善懲惡を絶對の教とされて來た舊い支那では、孝子や節婦が崇敬の的とされ或は牌樓の柱に或は石碑にその徳行が宣傳のやうに表彰されて居た。そして寺や廟の境内には必ず官吏の徳政を禮讃した頌徳碑が並べられて居るがそれも官尊民卑のお手盛りものがあるらしい。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 延吉市街

(延吉)

延吉は舊名局子街と稱へ龍井村と共に間島地方を代表する都市で、昔から地方政治の中心地として商業の龍井村と對立して來た町である。事變前は排日運動の策源地で度々血醒い事件が繰返された處、近來平安を見ると共に漸く發展し現在人口二萬五千あり。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 六角堂

(延吉)

どこの町を歩いても公園らしい箇所には、何々亭、何々樓と四阿やうのものがあり廟が建てられて居る。六角堂もその一つで此處より一望の下に展開せらるゝ沃野はその生産額年六十萬石餘と云はれ延吉はその中心として敦圖線開通以來發展し今日に至つた。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 弔魂碑

(延吉)

事變前は勿論事變後も有名な匪禍に悩まされ續けて來た此の地方では今の樂土を生む迄に幾多の尊い犠牲の碧血が血ぬられた。延吉高臺新らしく建立せられた此の碑前に額つき、文化開發の先驅を飾る人々の遺業を偲びつつ、現在を感謝すると共にその冥福に黙禱を捧げる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 敦化の町 (一)

(敦化)

敦化の町は四圍山に包まれた敦化盆地の中央に位し牡丹江の左岸にある。人口二萬二千、遠く渤海時代から阿克敦城として知られ敦化の名稱は清末に改稱されたもので、最近迄吉長吉敦鐵道の終點として樞要な地位を占めて來た。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 敦化の町(二)

(敦化)

敦化は古來間島、寧安方面と密接な關係を持して來た町で、城内は相當整つた市街であるが度々兵匪の慘禍を蒙り市況疲弊し現今漸く稍々恢復に向ひつゝある田舎臭い町である。附近の牡丹江は物資の搬出に利用され木材雜穀等がその主要物である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 元帥陵を望む

(奉吉線)

元帥林より約一軒、後に鐵龍山の懸崖を控へ、前に渾河の清流を望んだ水龍臥と稱へらるゝ丘陵に、青葛麗はしく陽に映ゆる一廓が元帥陵である。一代の梟雄張作霖が自らその陵墓を建設せんとして此地を選び工事半ばにしてその儘残された地、緑林より出で皇帝を夢想せる豪華を想ひ今日に及ぶ時轉た感慨無量のものがある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 寢陵の石階

(元帥林)

大理石を繞らした外廓の周圍に三門あり、正門より更に山門二基を経て進めばこの石階に達する。結構の壯、規模の大は自から大元帥を僭稱しその墳陵を帝王に模した風雲兒の心境を如實に物語るが、今は主なき残骸を尋ぬる者もなき轉變の世にその末路を曝すのみである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 廢

墟

(元帥林)

多額の工費と暴力の強壓とで先考の遺言により建設されんとした陵墓も完了半ばにして滿洲事變は總てを清算して終つた。山河依然舊態、唯残るものは雨露に曝された大理石の輪換と、散亂されたグロテスクな石獸の醜骸のみである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎東豊の公園

(西安線)

東豊は昔から東山地方と呼ばれる、附近一帯に於ける特産の出廻地として知られ、事變後度々匪害を被つたが現在は市況も漸く回復しつつあり、人口一萬七千餘、縣公署所在地である。これは公園の丘上に建てられた記念の忠魂碑である。

(印畫の複製を嚴禁す)

亞東印畫輯第四百十二回 (4)



◎ 街の野菜屋

(東豊)

畠から掘出されたまゝの新鮮な味覺、土の香にそよらるゝ淺春の田園圖譜、餘り商賣もないらしい街頭の野菜屋さんの純朴らしさ、今漸く客に當り付いて何やら世間話の最中である。まだ晝には間のある田舎の町での一風景をそのまゝ——東豊にて——

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 西安炭坑 (一) (西安線)

西安炭坑は縣城より北方四支里の地にして、礦區は東西十支里、南北四支里あり、埋藏推定量一億一千萬噸、炭質は瀝青炭にて粘結性と弱粘結性とあり、出炭年額二十萬乃至三十萬噸を算して居る。資本金二百萬元、今は滿洲炭礦會社の管理にある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 西安炭坑 (二) (西安線)

西安炭坑は現在斜坑二、露天堀二を有しその採出炭は直接奉吉線を経て遠く哈爾濱其他の北滿の都市及びその沿線各地に販路を擴げて居る。近來近代式採炭法の採用と共に逐次出炭量も増加し、近き將來に南の撫順と共に北に炭都西安を見る日が來る事であらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎西安の街(一) (西安線)

西安は奉吉線から分岐した西安線の終驛で、昔此地方は清室の御獵區に屬せる地である。光緒二十六年解放せられ同二十八年縣城を置かれ爾來地方行政の中心となつて來た。事變後も他の地方と異り兵匪の慘禍を蒙る事少く市況も殷盛を呈して居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎西安の街（二）  
（西安線）

西安の東南隅にある龍省山上から俯瞰した町の全景でこの山は明末の頃の葉赫東城主の居城の跡と稱はれ、現在頂上の魁星樓の傍にある土臺石がその當時の遺跡と傳へられて居る。この町は全體が比較的整つた、北滿によく見る平べつたい黄い氣分の少い落付いた町である。

（印畫の複製を嚴禁す）



◎西安の街（三）

（西安線）

西安の町は地勢に恵まれた上に背後地一帯に肥沃な農耕地域を控へ、更に附近にある西安炭坑はその急激な進展を促して今日の盛況を見るに到つた。人口三萬餘、町並も整然とした都市で特に炭坑今後の躍進は町の前途に將來を約するかに思はれる。

（印畫の複製を嚴禁す）

亞東印畫輯第四百十二回（10）



◎ 農安の古塔 (農安)

農安の西端に巨然として聳立する隆安塔は高さ三十丈八角形の矗立した古塔に苔蒸して櫛風沐雨幾星霜、今は頽落したまゝ淋しく古都を物語るのみである。建立年代は確實に不詳であるが由來滿洲の塔は多く遼、金時代の全盛期に建立せられたもので、これも遼の聖宗の頃のものとして傳へられて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 小南門外 (農安)

農安は昔から松花江に沿ふた肥沃な盆地の農産や畜産の中心地として古い歴史と共に名の現れた町で、近來は國都新京の連接背後地として聯絡あり物資の集散と共に商況殷盛を呈すると共に、更に京白線の連絡はそれに拍車をかけて活氣を呈して居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 農安西大街

(農安)

農安と扶餘は共に滿洲に於ける文化の淵藪と云はるゝ町で、遠く扶餘國の昔から渤海、遼、金、元、明の各時代を通じてその政治中心地となつて來た。現在人口二萬五千餘、町を繞る土壁の四圍に四門あり東西南北の四大街に區劃せられ整然とした市街をなして居る。

圖はその商業區西大街である。

(印畫の複製を嚴禁す)





◎ 藥屋の看板 (農安)

これは藥屋の軒先にあつた招牌で、藥屋の看板は元來菱形の白い板の上下に三角の板を吊し、それに黒色を描きその下に瓢箪や魚が下げられるのが普通である。これは少し變つた型で大方瓢箪は神仙が仙丹を藏するに用ひた容器と云ふ處から標識されたものであらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 扶餘 全景 (扶餘)

紀元前此邊一帯に覇を唱へた扶餘國の首要部が此地方に置かれ、その後渤海から清の雄圖を見る迄その間幾變遷、一時は蒙古人の手に占據せられた時代もあつた。清の大祖の時代これを撫定し、松花江を清、蒙の境界と定めその左岸に伯都訥と命名した町が今の扶餘である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 扶餘の街 (扶餘)

扶餘の町は清の初期に此處を平定すると共に、松花江岸の豊饒地帯を山東、直隸方面よりの移民に開拓せしめて以來、河流を利用した奥蒙古との貿易が盛んに行はれて來た。近來蒙古の開放と共に對蒙貿易は衰へたかの感もあつたが、京白線の開通はこれを補つて更にその發展を期待される。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 暮 近 き 江 岸 (扶 餘)

松花江も扶餘の邊から漸く大河の水勢となり、河幅三百米、水深八米、更に數キロの下流に嫩江を合せて懸々本流となる。沿岸は漁業行はれ冬期は寒氣を利用した凍魚が滿洲各地や北支に出されて行く。  
夕近き川面には明日を待つ苦舟が靜かに波に揺られて驟然と暮色に溶けて行く。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 關 帝 廟

(扶 餘)

關帝廟の神位は關羽で劉後主に盡した誠忠を頌する意味で祭祀されたもの、忠義神武の武神と共に俗間には比干と並べられて柄にない財神としても多大の人氣をうけ支那や滿洲には至る處に祠がある。此廟は昔強烈な風のため砂塵に埋もれたが再びその儘出現した靈現のあらたな言傳へが残されて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 三 母 廟 (扶餘郊外)

扶餘の南門から四滿里程離れた郊外に三母廟がある。古都扶餘の名にふさはしからぬ新らしげな丹碧の薨が三棟整然と並んで居た。立昇る香煙も淡いが、やがて祭の頃になれば参詣に螺集する善男善女の渦に埋もれていきれに賑ふ日が来るであらう。建立は民國四五年の頃と云はれて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 太 陽 廟

(扶 餘)

數多き天の諸星の内で日月を最貴として崇拜祭祀したのが太陽廟で、思想の幼稚な時や處では種々な神様が繁昌した。三層高樓の屋上高く喇嘛塔を飾つたかたはら『佛光普照』の文字が麗々しく書かれたり、大體に通俗的な宗教なだけに建築様式にも教義にも何教と區別し難いほど順應性が現れる。

(印畫の複製を嚴禁す)

亞東印畫輯 第二百二十六回附錄

新年號附錄

『歸 路』

.....熱河にて.....

大連市淡路町

亞東印畫協會











XI
1

# 亞東印畫輯

---

8

